こいけものがたり

善三郎翁記

立山寺・光明寺
瑞龍寺に納材

昭和五年頃入善町吉原・光明寺の再建工事が始まった。昔は海辺より相当の距離があったそうだが、日本海岸の浸食が激しく、最近は海際になったので、内陸寄りに移転再建するという事であった。予算の関係上、軸材は欅材を使用するが、補助材・造作材は桂・アピトン・米松・紅松等各樹種を夫々適所に使用する設計であった。

総工事請負者は松井角平氏、現場責任棟梁は東城稔氏（富山西別院棟梁・東城助太郎氏の養子、現松井（建）金沢支店長・東城祐美氏の父。）針葉樹が多かったので、私の店の北隣の塚本製作所で、父の指揮の元で造材した。私は同年三月学校を卒業、四月から店に新入社員として入店し、工事は七、八月頃から納材が始まったと思う。入店直後の事で、まだ何も解らない時代だったが、構造材から造形材迄、全量一通り木取りに従事したのは、この時が始まりの終わりでもあった。勿論父から、社寺用材の木取りの「コツ」を教わった。免許皆伝と迄はいかなかったが、理屈は一通り飲み込んだ。前にも書いた通り「門前の子僧、習わぬ経を読む」式に、少年時代からの見覚え、聞き覚えも相当に手伝いまた、甥の従業員幸チャンのよき助手も手伝った。仕事となると父はなかなか厳しく、木挽連から「雷親爺」と異名が高かった程あって、「馬鹿野郎」と怒鳴られない先に、木片か丸太の切れ端が飛んで来た事を、今でも覚えている。全く「スパルタ教育」であった。

昭和十一年頃、立山町の、眼目山の立山寺（さっかのりゅうせんじ）の再建工事が始まった。総工事請負者は松井角平氏、現場責任棟梁は田口権太郎氏。（婦負郡山田湯村出身。）工事概況は、予算の関係で軸材の一部のみ欅材・残り桂材・姫子松。欅材だけは私の店の新設製材工場（昭和十年操業）で製材納入し、残りは桂材・姫子松材が多かったので、兼ねて当店へ出入していた、高山市の砺波健太郎氏に下請けを願った。彼は引き受けて納材した。納材途中、打ち合わせの為、繁しく私の店へ出入りした。雑談中に彼に娘の子がいる事が判り、父が仲人役となり、甥の山川常次郎氏と結婚する。現在の山川木材店主、山川徹氏の母親である。桜町の私の家の貸家に入居、新婚時代を生活した。

昭和七、八年頃だったと思う。高岡の瑞龍寺の国宝建造物の修理が、文部省の手に依って行われた。当時高岡では、山崎与吉氏・熊木吉次郎氏・炭元五平氏・熊木次吉氏の四大問屋があった。針葉樹製品、特に、秋田材・青森ひば材の製品の取扱いは、金沢勢と対抗して、北陸で覇を唱えていた。瑞龍寺へ用材納入の入札が始まった。彼等は、「吾々は高岡市内の事であり、面目を保つ上からでも、私の店に入札を遠慮願い度い」という申し入れがあった。世間一般からの目は、針葉樹製品問屋だろうと、社寺用材屋だろうと、材木屋に相違なく、内容は解らないのは当然である。私はまだ若かったので、大反対したが、父は彼等の申し入れに従順に従い、私の店は入札に不参加、四者が適当に四等分して落札した。文部省の工事であるから、勿論公入札、検査も国宝修理用材だから当然厳重であった。夫々四大問屋の傘下の下請として、氷見の田子材木店（現在の富山田子銘木店）森長材木店を始め、砺波、能登の材木店へ納材依頼したが、何回納材しても全部不合格、斯のしている中に、納期が迫り、愈々納期遅延による罰金という段階に迫って来た。老獪で有名だった、熊木吉次郎氏の弟、熊木作次郎氏が私の店に来て、父に下請納材方を依頼した。私は熊木氏が文部省に対し、納入を辞退し、私の店の名義で納入すべきであると父に主張した。私の店は当時、文部省の全国、国宝・重要建築物の補修用材の指名入札参加業者となっていたので、当店の今後の名誉にかけて、斯くすべきである、と父に抗議した。父は商売は「名を捨て、実を取るべきだ」と簡単に熊木氏の申し出を引き受けた。二、三日間程で造材し、納入したら、全部一発合格であった。残り二、三社も次々に納期に追われ、父に依頼して、結局は欅材の大部分は私の店が納入した。足元を見た訳ではないが、私の店は安く下請けしなかった為、各社損をしたらしいが、面子だけは保たれた。最終の納材には私もトラックに同乗して行き、検査に立会した。以前に、石動の植生八幡宮の国宝修理用材の台湾檜納入の時、見覚えのある文部省の滝口技師さんであった。滝口技師は多分そんな事だろう、と当初から思っていた。無事完納出来て、おめでとう、と笑い乍ら、私の肩を叩いてくれた事を覚えている。金額的には、全量でも大きな金額ではなかった。

高岡の四天王は面目が立った事で、私の店は彼らに商売上の「貸しを作った事」になり、金が儲かり、文部省に対しても信用が地に墜ちた訳でもなく、同業者円満であれば結構でないか、と後日になり父から諭された。私は当時はまだ二十才内外であったので、心身共に若かったのだと、今日思っている。

（現在の瑞龍寺）